2313　離島覚書（山口県・前島）

久賀港から前島を望む

令和５年６月 29 日

再訪

安下庄（あげのしょう）の千鳥旅館から東和タクシーで前島航路のある久賀（くか）港へ向かう。タクシーの運転手の話では、前島の女性客３人を時々乗せるという。病院で用事を済ませた後、農協に寄り一週間分の食料や日用品をまとめて買い、第２便で島に戻るそうだ。

久賀港と前島の間には１日３便、町営渡船が運航されており、７時 10 分発の第１便で前島に向かった。2012 年９月 27 日以来、約 10 年ぶりの再訪である。乗客は私１人。海は鏡のようなべた凪であった。約 20 分で前島に着いた。島を再訪したのは、帰りの電車内でカメラを失くし、前島の写真が残っていないためだ。

前島は面積 1.09 ㎞^{2}で、周囲 2.2 ㎞の瓢箪型をした島で、南北に標高 100ｍほどの山があり、２つの山のくびれた部分は峠になっていて、この東西に集落が形成されていた。平地はほとんどなく険しい山が連なる。山が比較的深いため、水は豊富で飲料水は湧水を利用している。

前島は 1737（元文２）年に久賀の庄屋・伊藤氏が久賀村の農家３戸を移住させて開拓したのが始まりといわれている。人が住んだ歴史は 300 年弱と浅い。合併により周防大島町になる以前は旧久賀町に所属していた。

前島漁港（第１種）には３つの浮桟橋が設置されていた。１基は渡船の専用桟橋、もう１基には「豊洋丸」という底曳網漁船と刺網用の小さな漁船が係留されていた。後でわかったがこの漁船は島民ものではなく、後述する大下さんの息子が管理を依頼されている漁船だった。もう１基にはＦＲＰ製の生簀が係留されていた。今も使われているのかどうかは定かではない。

漁港用地には今は使われなくなったタコツボと籠が放置されていた。10 年前に来た時には大下さんが小型定置網を営んでいたが、現在は漁業を営む者はいない。

かつては近くの浮島と同様、イワシ網が３ヶ統（西集落に２ヶ統、東集落に１ヶ統）あり、イリコの加工も行われていた。その加工場跡が漁港の前に残っている。またトリガイが豊漁だった時代、前島には裕福な漁師が多く、羽振りがよかったという。しかし、山口県が海砂の採取を許可したことにより、海底の環境をダメにしてしまい、貝類は壊滅したと言われている。

桟橋から上がった先に船客待合所が置かれている。ここにバックパックを置き、島を探索することにした。

前島漁港に着いた町営渡船（左）、前島の集落（右）

実質人口は５人に減少

1960（昭和 35）年国勢調査時の前島の人口は 244 人であった。その後一貫して人口は減り続け、50 年後の 2010（平成 22）年には 14 人になっていた。10 年前に訪れた時の実際の人口は 11 人（男：２人、女：９人）だったが、今回は５人（男：２人、女：３人）と、さらに減っていた。ちなみに 2020（令和２）年国勢調査時の世帯数は４戸、人口は５人だったので、数は変わっていない。ただし構成員は変わっている。今年の５月末時点の住民基本台帳上の人口は７人、世帯数は７戸であったことから、住民票だけを置く人が２人ほどいることになる。

船長の話では、現在実際に住んでいるのは男２人、女４人の合計６人とのことであったが、上陸後の調査では、そのうち女性の高齢者は本土の病院に入院中であった。５人の内訳は、10 年前に取材した岡村和枝（85）さんと自治会長の岩村よしあき（75）さん、中村さん（男）（65）とその姉、そして増中さん（女）である。10 年前に来た時、Ｕターンして島で唯一の男手として期待されていた大下豊水さん（当時 55 歳）は４～５年ほど前にすでに亡くなっていた。

当時から継続して島に住んでいるのは岡村さんと中村さんの姉の２人だけである。つまり９人が死亡ないし病気などで島外の施設に移動し、新たに３人が加わったことになる。自治会長の岩村さんは４～５年前に大阪からＵターン、中村さんは１年半ほど前にＵターンしてきた。

前島は渡船が泊まる西側の集落と峠を越えた反対つまり東側の集落に分かれている。西側にはざっと 20 戸、東側に 10 戸ほどの家があったが、現在は西側に３戸、東側に１戸住むだけで、残りの家は空き家になっている。長いこと人が住んでいなかったことからすでに崩

れかけた家も多い。

自治会長の岩村さん（左）、崩れかけた民家（右）

寂しい祭り

10 年前に前島を訪れた９月 27 日は前島神社の例大祭の日であった。当時から１日３便の連絡船が通っていたが、10 年前は第２便で前島に出かけた。

前島漁港に着くと、祭事を終えた神主がちょうど帰りの船に乗り込むところで、島の男女２人が送りに来ていた。神主が乗り込むのと引き換えに本土側から届けられた仕出し弁当が降ろされた。

連絡船の船員は、「３～４年前までは、島の外からも人が戻って来て、餅を蒔いたりしていたが、今は男がいなくなり、高齢の女性ばかりで祭りは寂しいものになった」と話していた。

仕出し弁当を受け取った老婆はスタスタと集落の険しい坂を登っていく。神社には島の人たちが集まっていて、一緒に弁当を食べるだろうから、そこに行けば島の人に会えると思ってついて行った。老婆は意外と健脚で追いかけるのが精いっぱいだった。

集落を登り詰めた先に前島神社があった。しかし、人はいない。そのうち弁当を取りに来る人が三々五々やってきてそれぞれの家に持ち帰って行った。老婆は「今日は祭りで忙しい」といって取り付く島もない。食事中に話を聞こうとの思惑は完全に外れてしまった。

神主を見送った男性が大下さんという方で、島で唯一の成年男子であった。男はもう１人いたがすでに 80 歳を超えた高齢者で、島の行事は大下さんの双肩にかかっていた。祭りの後片付けを１人で受け持ち、彼なしに祭りを催すことは不可能であった。

この大下さんはその後どんな暮らしをしていたのか興味をもって再訪したのだったが、すでに亡くなってしまったことはすでに示した。後述する中村さんによると、深酒が習慣になっていたようで、若くして風呂の中で亡くなっていたという。家族がおらず、男が実質１人の島で、きっと寂しかったにちがいない。

その後、前島神社の例大祭が継続して行われてきたのか定かでないが、前島神社の境内の木は伸び、草が茂っていて管理が十分でないところをみると、その後は行われなくなったにちがいない。最も若い中村さんは「御利益がない」といって神社への関心は薄かった。また「下手に木を切ると罰が当たる」とも語っていたので、前島に営々として伝わって来た前島神社の祭りはすでに絶えたものと考えられる。

前島神社へ登る階段（左）、前島神社の社殿（右）

島の酪農家

亡くなった大下さんには 10 年前に取材している。当時の取材メモを再録しておこう。

神社の前のベンチに腰掛け、コンビニで買ってきたサンドイッチで昼食をとっていると、島で唯一の成年男子である大下豊水さんが坂を登ってきた。これから祭りの後片付けをするところであったが、強引に引き止め、話を聞いた。

大下さんは前島の出身で、実家は島に３経営体あったイワシ網の網元の１つであった。イワシ漁の他に、タコツボ、小型定置網も営んでいた。

イワシ網の経営を巡って、大下さんが 20 歳のころ、父親が兄弟間の相続でもめ、長いこと裁判で争っていたのだそうだ。結局、大下さんは漁業を継がず、山口県の農業大学校に進学し、畜産の技術を習得した。そこで家畜の人工授精師の資格もとっている。子供のころからの夢は「大牧場をつくること」であった。

大下さんは夢の実現を目指し、島に戻って黄幡（おうばん）神社の下の方で牛を飼い始めた。和牛の繁殖が主で、生産した子牛を販売した。島での畜産業の定着に気を良くした大下さんはユンボを購入して、飼育規模をさらに拡大しようとした。地場産業の育成に熱心であった山口県は協力的であったが、国定公園であることを理由に国は拡大を認めなかった。また、周囲からの妬みの声もあり、島での事業を断念し、島を脱出することになる。

ちょうど周東町にある畜産企業が牛の繁殖のプロを求めており、その会社の社長の引きもあって就職、約 500 頭の牛を飼っていた。しかし、牛の繁殖にこだわる大下さんと跡を継いだ息子と意見が合わず同社を退社、２年前（2010 年）から前島に戻って、年老いた母親と暮らしている。子供は３人いるが、全員島には戻らず、奥さんとは離婚した。１人で年老いた母の面倒をみている。

島に再び戻ってからはツボ網（小型定置網）で生計を立てている。当時は船底の塗り替え作業中で、漁船は周防大島に置かれていたので実際に見ていない。

この大下さんは 60 歳前後で、短い人生を閉じてしまった。

旧小学校跡

前島神社の隣に久賀町立久賀小学校前島分校の旧校舎である。10 年前に来た時には草がきれいに刈られ、ここで岡村さんがエビス草の種子を干していたが、その場所はすっかり雑

草で覆われていた。人手が不足し、草を刈ることもできないのだろう。隣にある岡村さんの家を訪ねたが鍵がかかっていた。

前島の小学校は 1873（明治６）年３月に創立されている。1881（明治 14）年に本島の開明小学校の分校となり、さらに 1892（明治 25）年には同校の分教場になっている。戦後は久賀小学校の分校となる。

島には小学校しかなかったので、中学生になると大島の久賀の中学校に通った。当時は連絡船ではなくスクールボートが運航されていたそうだ。島の子どもが最も多かった団塊の世代では同級生は男女あわせて７～８人いたという。

現在 65 歳になる中村さんが小学校のころは同級生が６～７人おり、先生も島に住んでいたという。彼が６年生の時に現在の校舎ができたそうだ。年齢から逆算すると今から 53 年前、つまり 1970 年のことである。その後、児童数は急減し、1979（昭和 54）年４月には入学児童がいなくなったため、休校になった。1986（昭和 61）年に児童２名が入学して再開されたが、翌年には保護者が久賀地区に転居したため、児童は本校に移り、１年で再び閉校になっている。

その後、上述した大下さんの息子が小学校に入学したため 1997（平成９）年４月に再開されることになる。しかし、1999（平成 11）年１月にこの子が転向したため、再び休校になった。そして 2000（平成 12）年３月で分校は閉校となり現在に至っている。分校が再開された当時の事情は、全国の島を歩かれた本木修治さんの「小さな島の分校めぐり」（ハート出版）の中で紹介されている。

久賀小学校前島分校の校歌は周防大島出身の作詞家・星野哲郎の作詞だ。「島は小さく離れていても　大きな海と空がある　世界に続く前島の　わたくしたちは　ぼくたちは　きょうも希望にもえています」と歌われた学び舎はない。そして永遠に復活することはないだろう。

旧久賀町立久賀小学校前島分校の校門（左）、草で覆われた同分校の校庭と校舎（右）

荒廃した農地

小学校跡を訪ねてから神社脇の峠に戻る。峠には前島集会所、前島大師堂、前島老人の家を兼ねた平屋建ての建物が建つ。道路の反対側は小さな畑になっていてサツマイモとエビス草が植えられていた。ここを右折した先が反対側の東集落である。この東集落には 10 世帯ほどの家があったが、人が住んでいそうな家は一番高台の１軒だけで、残りの家はことご

とく木が伸びて建物を覆い、外から家を確認することすら不可能だ。

坂を下っていくと農作業をしている女性がいた。増中さんという。少し話を聞く。彼女は東集落の一番上の家に住んでいる。母親と一緒に住んでいたが、病弱のため現在は本土側の病院に入院している。岡村さんよりも年上と言っていたので、年齢は 90 歳を超えているようだ。

畑にはナスや素麺南瓜、エビス草が植えられており、周辺の草むしりをしていた。もう１ヶ所にも彼女の畑があり、ここにはキュウリが植わっていた。しかしかなり大きくなっている。１人では食べきれない量なのでちょうどよい時期に収穫できなかったようだ。

キュウリやナスの周りにはネットが張られている。前島にはイノシシはいないが、カラスが多く、食害を避けるためだという。

前島は集落の両側に標高 100mを超える山があり、水が豊富で、２ヶ所の水源地の水は枯れることがないそうだ。したがって水田がたくさんあり、米が穫れた。1966（昭和 41）年に宮本常一が前島を空撮した写真が残されている。集落背後の土地は段々畑に開墾され、畑は山のてっぺんまで拡がっていた。島の人々は歩いて畑や田に通ったが、今では道は失われ、農地は森と化している。

東集落の下から港にかけて平坦な土地がある。地形から見てかつて田んぼであったことは容易に想像がつく。しかし水田があったと思われる平地は一面ヨシ原になっていた。10 年前に来た時にはガマも多かった。恐らくすでに四半世紀近く耕作が放棄されたままなのだろう。

現在、島に住む５人のうち４人は自宅の近くで自給用の野菜を作っている。かつてたくさんあった農地はすでに草木で覆われ、そこに行く道もわからなくなるほど樹木が茂っている。ここを昔のように切り開き、そして農耕に通うほど４人には体力が残っていない。したがって自宅近くの狭い土地でふだん食べるものを細々と作っているわけだ。島での生活は自給用の野菜作りが重要な楽しみの一つになっているから、どの菜園もきれいに草が刈られ、トマトやナスなどの実物野菜はよくできていた。

増中さんの自給用菜園（左）、1966 年に宮本常一が撮影した当時の前島（周防大島文化交流センター所蔵）（右）

使われていない漁港

島の東側は比較的深い入江になっていて、入口には防波堤が造られ、静穏度の高い漁港になっている。漁港の先端まで行こうとしたが、途中から草が道路上まで侵入していたので、

断念する。

こちらの漁港は基本的に東集落の人々が利用していたと思われるが、風向きによって西側の漁港が使えない時にはこちらの港を使っていたこともあっただろう。

湾奥の一部は埋め立てられ、埋立地には長屋式の漁具倉庫が使われないまま放置されている。倉庫は６区画あるから盛期には東集落だけでも６戸が漁業を営んでいたと想像される。

漁港には船は１隻もない。避難港としての活用を図ろうとしても、船着場の背後は草に覆われ、事実上上陸できない。10 年前には大小２隻の漁船と船外機１隻が係留されていたが、今は全く使われなくなった漁港が残っているわけだ。漁業を振興する上で漁港の整備は重要な政策課題であったが、今や漁業の衰退によってこの例のように不要になった漁港が瀬戸内海各地に増えているのである。

ちなみに野菜作りをしていた増中さんの家は漁師で、父親は小型底曳網漁業を営み、夏はエビ類、冬は貝類やナマコを獲っていたという。

東地区の漁港（左）、埋立地に放置されている漁具倉庫とオイルタンク（右）

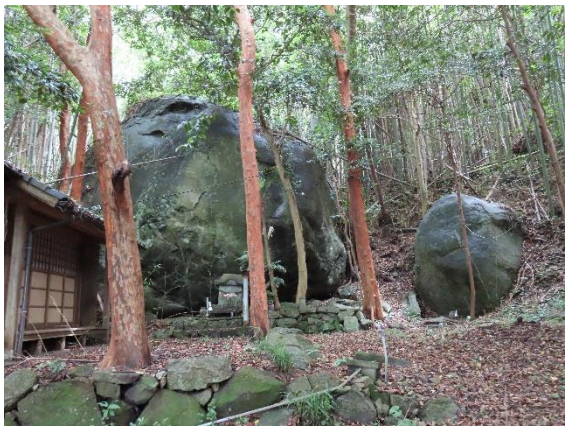
黄幡神社

東集落から坂を登り、右折して、舗装道路の坂を下る。港から峠に至る道は細く、かつ急勾配なので車は通行できない。この道は軽自動車の通行が可能で、港から高台に至る補完道の役割を果たしていると考えられる。港から重い荷物を峠まで上げるには車が通れる道が必要だったのだろう。しかし島には自動車はないから現在は全く使われていない。コンクリートの上には落ち葉が積もり、湿気で濡れており、アカテガニが盛んに走り回っていた。

舗装道路から少し山に入ったところに黄幡神社があった。この神社の御神体は巨石である。大きな石の前に小さな社が置かれ、脇に社務所のような古びた家が建つ。おそらく島に人が多かったころは段々畑が切り開かれており、境内は明るかったと思われる。しかし、今は樹木が大きく成長してうす暗く、蚊が多いのには閉口した。神社から階段を登ると石造りの古びた鳥居が置かれていた。通常の神社は鳥居をくぐって階段を登るのが普通であるが、黄幡神社は鳥居をくぐって階段を下ることになり、全国的にみても珍しい。

10 年前は神社の上のヘリポートまで行った。舗装道路が整備されていて、歩いて行けたが、今回は道路がわからないほど草で覆われ、行くことはできなかった。島の荒廃に拍車がかかっていることは確実だ。

さらに東集落の高台には海に向かって開かれた斜面に墓地があった。急勾配の地形に段々状に墓石が並んでいた。10 年前に墓地から見た多島海は穏やかで美しかったが、今回行ってみてその景色の変わりように驚いた。墓石周囲は草木で覆われ、視界は全く効かない。墓石が倒された場所も多く、島外に改葬した墓も目立つ。10 年の歳月は人の営みを消し去り、島をさらに自然に戻しているようだ。



黄幡神社の御神体である巨石（左）、階段の上に建つ石の鳥居（右）

Ｕターンの新島民

神社から海に下る舗装道路は、時々役場が草刈りをするようで、濡れた落ち葉が滑りやすいことを除くと比較的歩きやすかった。道路の途中に納屋やユンボが放置されていた。ここは昔棚田があり、その後、大下さんが牛を飼っていたところだろう。当時の残骸が森の中に放置されている。

道路を下りきると前島漁港に出た。そこでトマトなどを栽培している中村さんに遇った。大阪で定年まで勤めたといい、65 歳になる。１年半ほど前に生まれ育った前島に戻って来た。一時、地元の鉄工所に勤めていたこともあるそうで、浮島のイワシ網については詳しかった。野菜作りのかたわら港の前でキスを釣るそうだ。漁船は所有しておらず、もっぱら投げ釣りや防波堤からの釣りが中心である。西集落の前には砂浜が広がり、浜でゴカイが獲れたそうだが、この砂浜の一部は埋め立てられてゴカイはいなくなったという。

もう一人のＵターン者が現在自治会長をしている岩村さんである。彼は島を出て大阪で 60 年働き、４年前に島に戻って来た。２人とも年金生活で、家庭菜園を営み、魚釣りを楽しんでいる。

しかしこの先、Ｕターン者は期待できるだろうか。1979 年にいったん小学校は閉鎖されているから、この年に卒業した小学生は現在 57 歳前後になるだろう。これよりも若い島の出身者はいないことから、今後Ｕターンが増える見込みは薄い。おそらく現在最も若い中村さんの世代がＵターンの最後になるだろう。中村さんにこの先どうするつもりか聞いてみた。現在は姉と一緒に住んでいるが、島で一人になったら島を出て、本土側の施設に移ると語っていた。

豆を選別する女性

10 年前に前島を訪れた時、旧小学校の庭で、干した鞘から豆を出している１人の女性に

会った。その時の取材記事を再録する。

見かけたことのない小さな豆で、ここらでは「豆茶」にするのだそうだ。豆を煎り、お湯で煮だす。この島では昔から飲用しているらしい。また、茶粥にも使われる。種用に少しもらおうとしたが、１回煎じて飲む程の分量の豆をくれた。

帰って調べてみると、標準和名をエビス草という。漢方薬では決明子（けつめいし）と呼ばれ、北アメリカ原産で江戸時代に中国から渡来したようだ。ちなみにいただいたエビスグサは種を蒔いて代を重ねたが、３年ほど前に蒔き忘れ、途絶えてしまった。

この女性は岡村和枝（当時 75 歳）さんといった。８歳の時、母の出身地であった前島に学童疎開していた。もともと広島の天満町に住んでいたが、８月６日に、５歳の弟、２歳の妹、両親を原爆で亡くし、学童疎開で前島にいた和枝さんは１人残され、孤児となった。原爆投下の 10 日後、伯母、伯父と広島に遺体を探しに行った。広島は焼け野原であった。家の近くで見つけた遺骨を一応持ち帰ったが、本当に家族のものかはどうかはわからないという。

その後、前島にいた母の兄に育てられる。伯父はイワシ網を共同経営していた。子供の頃には小学校の生徒は 50 人ほどもおり、中学校も島にあったのだそうだ。小学校は現在の場所よりも高いところ、中学校は東側に降りた現在は藪になっているところにあったらしい。

中学を卒業し、岩国に出て働いた。しかし、伯父さんの調子が悪くなってからは、田畑の農作業を手伝うため島に戻った。その後、島の人と結婚。嫁ぎ先の長男は養子で島を出たため二男と結婚し、家を継いだ。子供はいない。生きていれば 50 歳になる子供を久賀に向かう船の中で亡くした。当時は連絡船もなく、船は小さく、遅かった。少々の時化でも船は出ないし、忙しい中で病院にも行けなかった。陣痛があって、船で久賀に向かう途中の出来事であった。以来、子供には恵まれなかった。

10 年ぶりにお会いした岡村和枝さん（左）、彼女が栽培しているエビス草（右）

和枝さんは農業のかたわら久賀へも働きに行った。惣菜とアイスクリームをつくる店だった。なんでもアイスクリームは大手の製品に自家製を混ぜて作ったのだそうだ。島では米とミカンの他に芋、麦、野菜類をつくり、自給自足の生活をしていた。各家では牛を飼い、島の道はせいぜい牛が通れる程度の狭い道だった。なお、ミカンは 1991（平成３）年の台風 19 号による塩害により全滅したそうだ。夫は型枠大工で、周防大島で働いていたが、20 年前に亡くしている。彼女が 56 歳の時のことで、再び１人になった。それから単

身、小学校の脇の自宅で過ごしている。原爆で彼女の人生は大きく狂った。「あんたと同じような人が前に見えたよ」といって家に戻り、本を持ってきた。本木修治さんが取材に来て、後で本を送ってくれたものだ。また、和枝さんを取材した中国新聞の記事を見せてくれた。和枝さんは、「もう私の人生はここで終わりだ」と諦念を込めて語った。

この和枝さんに 10 年ぶりに再会した。彼女は朝の１便で久賀に出て、用事を済ませ、２便で島に戻って来た。私はこの船に乗って久賀に戻ったので、すれ違いだった。10 年前に撮影した写真を失くしてしまったので、写真を撮らせてもらった。

11 時 45 分発の渡船に乗り、久賀に戻る。バス停の前の「オアシス」という軽食店でカツカレーの昼食を食べ、路線バスに乗って大畠へ出た。